

## 古代史シリーズ8

# 「日本人の祖先と日高見国」



本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

日本人の祖先は「日出ずる国」を目指してきた縄文人・弥生人に由来します。

日出ずる国を目指してきた民に世界の流浪の民といわれるユダヤ人が多く関係していることが考えられます。日本の文化改革に大きくかかわった秦始皇帝を祖とする秦氏も含め、日本人のルーツを探ります。

著者：情報戦略モデル研究所

井上 正和



はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前「ローマのSTOやコンサルタントが専門でした。十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。」

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀(以降は「記紀」という)が読めなかったり、古代史は良く分らないと思われる初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれない。また、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元STOとしてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれない。

古代史シリーズ8は、「日本人の祖先と日高見国」と題し、日本人の祖先となる縄文人・弥生人のルーツを体系化しようとするシリーズです。縄文時代は関東を中心として、関東・東北に人口の集中があります。そして弥生時代には畿内の人口が急増します。縄文時代に関東にいた渡来人が畿内に移動しました。縄文時代から弥生時代、古墳時代、奈良時代に多くの渡来人が来日し大和を創っていきました。奈良時代には人口の三分の一が渡来人であったと言われています。この渡来人にユダヤ人、秦氏が大きく関与しています。

本冊子は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキペディアからかなり引用しています。活用しました主要参考図書は次の通りです。

- ＋「日本の起源は日高見国にあった」田中英道著 勉誠出版
- ＋「発見！ユダヤ人墳輪の謎を解く」(田中英道著 勉誠出版)
- ＋「高天原は関東にあった」(田中英道著 勉誠出版)
- ＋「物部氏の謎」(飛鳥昭雄&三上たける著 学研)
- ＋「ヤマトタケルのまほろば」(産経新聞)
- ＋「徐福伝説を探る」日中合同シンポジウム(梅原猛&他著 小学館)
- ＋「出雲と大和のあけぼの」(斎木雲州著 大元出版)

十「古事記」(竹田恒泰 学研)

十一「日本書紀」(宇治谷孟 講談社)など

本冊子の古代史シリーズ8 「日本人の祖先と日高見国」の全体構成は次の目次にあけて置きます。

## 古代史シリーズ8 「日本人の祖先と日高見国」の目次

第一章 「古代イスラエル王国の歴史」	5
ディアスポラ(流浪)の民となった古代ユダヤ人の歴史と日本への移住経緯の大枠を探る。	
第二章 「徐福伝説」	15
中国の正史「史記」の記述と日本各地に残る伝説、考古学的遺跡から徐福伝説を探る。	
第三章 「東国のユダヤ人埴輪」	26
日本人の遺伝子は中国人や朝鮮人の遺伝子とは異なりユダヤ人と同じYAP遺伝子をもつその由来を探ります。	
第四章 「秦王国、日本国、東国」	36
中国の隋書、旧唐書、新唐書に日本には倭と日高見国として、二国で日本の記述をしています。日高見国を秦王国、日本国、東国から識別していきます。	
第五章 「縄文人と日高見国」	47
関東・東北に縄文文化を開いた日本人の祖の渡来ルートと高天原と想定できる日高見国の中心にある鹿島を捉え、鹿島神宮と香取神宮の記紀神話との関係を探る。	
おわりに	61

◆第一章 「古代イスラエル王国の歴史」の目次

第一話 ユダヤ人の古代系譜……………6

第二話 南朝ユダ王国のその後……………11

第三話 日本にやってきた三種の秦人……………12

コラム…「エルサレム神殿」……………14



参照資料1-2: モーゼの十戒とシナイ山

出典:ウィキペディアから原因引用

絶対神ヤハウェとの契約

モーゼの十戒

- 主が唯一の神であること
- 偶像を作ってはならないこと(偶像崇拝の禁止)
- 神の名をみだりに唱えてはならないこと
- 安息日を守ること
- 父母を敬うこと
- 殺人をしてはいけないこと(汝、殺す勿れ)
- 姦淫をしてはいけないこと
- 盗んではいけないこと(汝、盗む勿れ)
- 隣人について偽証してはいけないこと
- 隣人の財産をむさぼってはいけないこと



シナイ山



+

約束の地 **カナン**

「出エジプト記」には、紀元前十三世紀ごろイスラエル人は古代エジプトに居て、奴隷として虐げられていた彼らを救ったのが預言者モーゼ(レビ族)であることが記されています。そして、シナイ山で絶対神ヤハウェ(エホバ)から「十戒石板」を授かり、ユダヤ教が誕生します。絶対神ヤハウェとの契約を結んだイスラエルの民は、その後四十年の旅を経てパレスチナにたどり着き、古代イスラエル王国を築く。首都はエルサレムである。絶対神ヤハウェとの契約とは、十戒とカナン(現在のイスラエル)という地を保証するという「約束の地」の契約である(参照資料1-2)。

王国はダビデ王の時代に急成長し、その息子ソロモン王の時代に絶頂期を迎える。エルサレムに壮麗な神殿「ソロモン神殿」を建築する。しかし、ソロモンが死ぬと王国は後継者をめぐり大混乱し、ついには南北に大分裂する。ユダとベニヤミンの二氏族から成る「南朝ユダ王国」、その他の十氏族から成る「北朝イスラエル王国」である(参照資料1-3)。

\*ユダヤ人

アリア系の民族で、「旧約聖書」でいえば、大洪水で有名なノアの息子の一人のヤフヰトの子孫である。アリア人とはインドヨーロッパ語族のうち、インドおよびイランに定住した支族を言います。

ノアの息子のセムの子孫である。セムは別名をメルキゼデクといった。大司祭メルキゼデクにまみえ、預言者として注命(しょうめい)されたのが大預言者アブラハムである。そのアブラハムの息子イサク、さらにはイサクの息子であるヤコブ、別名をイスラエルという。すなわち、**預言者ヤコブの子孫が今日というイスラエル人である。**(注)神の恵みによって神に呼び出されること。

ヤコブには十二人の息子が出来ます。その十二人の息子は四人の母から生まれます。生まれた順にルベン、シメオン、レビ、ユダ、ダン、ナフタリ、ガド、アシエル、イッサカル、ゼブルン、ヨセフ、ベニヤミンと名付けられた。父ヤコブの死後、それぞれ皆一族の長となり、ルベン族、シメオン族、レビ族……という支族が誕生します。ただし、レビ族だけは祭祀を司る専門職であるため、通常、イスラエル十二支族には数えません。

### 参照資料1-3: 古代イスラエル王国の歴史

出典: ウィキペディアから原図引用



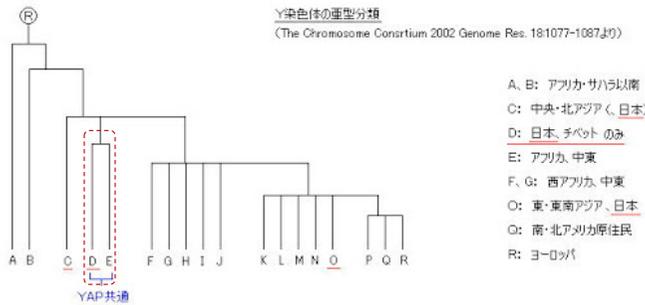
イスラエル 年表			
時代区分	年代	出来事	人物
出エジプト	1300	契約と律法の成立 パレスチナ進出	モーセ ヨシュア
士師時代	1200	イスラエル農民戦争	デボラ サムエル
統一王国	1003	エルサレム征服 神殿建設	ダビデ ソロモン
南北王国	926	王国分裂	
	722	イスラエル亡び	エリヤ アモス ホセフ
ユダ王国	701	イザヤがエルサレムを守る 申命記改筆	イザヤ ミカ
	622		
捕囚時代	597	バビロン捕囚	エレミヤ エゼキエル
	587	神殿の破壊	
ペルシャ支配	538	捕囚の解放	
	515	神殿再建	ハガイ ゼカリヤ
ギリシャ時代	333	アレキサンドロスの支配	
ローマ時代 BC	63	ローマの支配	
	06	イエス誕生	イエス パウロ
AD	70	神殿の破壊	

南朝ユダ王国、  
北朝イスラエル  
王国  
北イスラエルが  
アッシリアに滅ぼ  
される  
612年:失われた  
イスラエルの  
10氏族

当時、この地にあれば、スキタイの影響を考えざるを得ない。スキタイはカスピ海沿岸を発祥地とする騎馬民族でその痕跡は北欧から北朝鮮まで及ぶ。また、スキタイ文化と言われる高度な金属文化(鉄、金等)をもっていた。当時、北アジアの草原を縦横無尽に駆け抜け他国を侵略し、奴隸や財宝を略奪した。捕囚されていたイスラエル人は連れ去られ、遊牧の民であったことから騎馬民族の中に拡散して行ったと言われている。スキタイの流れをくむ東北アジアの騎馬民族夫余(ふよ)族は高句麗や百済を建国し、その一派が日本列島へ渡ってきたと言われる。スキタイの一派のサカ族の一つは、後に仏陀を生み出す釈迦族である。イスラエル十支族調査機関「アミシャーブ」によって、チベット系民族の一つ「羌族(きょうぞく)」は

その北朝イスラエル王国を作ったイスラエルの十氏族は失われたイスラエルの十氏族として有名である。その経緯を追ってみよう。  
この氏族は北朝イスラエル王国の首都をシケムに定め神殿を建設するが、しばらくして十戒で禁じられている偶像礼拝に陥る。十戒の第二項には「偶像を作つてはならないこと(偶像崇拜の禁止)」と記述されているが、「黄金の子牛像」を作り神とした。そのため、絶対神ヤハウェの怒りを買ひ、罰を受ける。その罰とは、紀元前七二二年、メソポタミヤで急速に勢力を拡大してきたアッシリア帝国がパレスチナ(現在のイスラエル)へ進出し、北朝イスラエル王国は三年間包囲され首都シケムは陥落する。北朝イスラエルの民はアッシリア帝国軍に捕囚され、奴隸としてメソポタミヤへ連行される。  
その後、紀元前六一二年、アッシリア帝国はメディアとカルデアの連合軍の戦いに敗れると一気に衰退し滅亡する。しかし、奴隸の軛(くびき)から解放された北朝イスラエルの民はパレスチナに戻らず歴史上から消える。いわゆる「失われたイスラエルの十氏族」という世界史上最大の謎となった。  
失われたイスラエルの十氏族の行方だが、全く分らないわけではない。「古代ユダヤ誌」(フラヴィウス・ヨゼフ著)によれば、「十氏族は今でもユーフラテス河の彼方におり、膨大な数となっている」と記している。パレスチナから見てユーフラテス河の彼方とは、アジアである。今のアフガニスタン、イラン、インド、そして中国といった広大な大地に移り住んだらしい。

参照資料1-4: YAP遺伝子



参照資料1-5: スキタイ族の騎馬軍団と金属文化



出典: ウィキペディアから原図引用

スキタイはユーラシア大陸の騎馬民族として最初に登場する民族であり、そのスキタイ文化は西アジアのヒッタイトなどから鉄器の製造を学び、それを東方に伝え、他の遊牧騎馬民族に大きな影響を与えた。

ヒッタイトとはインドヨーロッパ語族に属する一民族で、紀元前千九百年頃、西アジアに起こった広範囲な民族移動の動きの一つとして東方から小アジア（アナトリア）現在のトルコに移住し、既にその地で始まっていた鉄器製造技術を身につけ、有力になったと考えられている。

スキタイはヘルシア人からはサカ人と呼ばれていたが、言語的には同じイラン系民族に属すると考えられている。スキタイ人の存在はギリシアの歴史書にも現れ、ヘロドトスの『歴史』では詳しく記述されている。

失われたイスラエルの十氏族の末裔であることが判明した。現在のネパールに住む釈迦族の末裔シャークヤやチベット人は日本人と遺伝子的に近く、YAP 遺伝子を持っている(参照資料1-4)。

日本に渡来した民族の中に騎馬民族スキタイの文化を持ち込んだ一族がいる。流鏝馬や鉄器などの金属文明を持ち込んだ。スキタイ人とはどんな種族であろうか スキタイとは、紀元前六世紀頃を中心に、黒海北岸の南ロシア草原を中心に、ユーラシア内陸で活動した遊牧騎馬民族で、高い騎馬技術と金属器文化を持っていた(参照資料1-5)。

紀元前八世紀から前三世紀ごろ、カフカス地方の北側、黒海北岸からカスピ海北岸のヴォルガ川までの草原地帯で活動した騎馬遊牧民で、スキタイ文化と言われる高度な金属文化を持っていた。彼らの文化は草原の道(ステップロード)を経て東方にも広がり、中央アジアのパミール高原の東西からモンゴル高原、中国北部にも及んでいる。スキタイの全盛期は紀元前六〜紀元前五世紀ごろであった。

現在、南ロシア、ウクライナからクリミア半島にかけての黒海北岸から中央アジアにかけて、彼らの墳墓が多数発見されている。紀元前七世紀から紀元前六世紀のスキタイ人の首長を埋葬した墳墓（クルガン）が発掘され、おびただしい金製品が発見された。とくに多くの枝に分かれた角を持つうずくまった鹿や豹や、さまざまな姿勢で戦う猛獣を組み合わせた、「動物意匠」と言われる形態をとる金や青銅の製品は、スキタイ文化の高度な到達度を示している（参照資料1-5）。紀元後の三世紀ごろに始まったゲルマン民族の活動の中で、東ゴート人が勃興し、それによつてスキタイは滅ぼされた。スキタイ文化の動物意匠金属器、騎馬遊牧民であるスキタイ人の文化は、騎馬の技術、馬具、武器に施された動物紋などが特徴である。紀元前十世紀の中央ユーラシアに広く影響を与えた。

## 第二話 南朝ユダ王国のその後

ヤコブの十二支族の内のユダとベニヤミンの二氏族から成る南朝ユダ王国の経緯を見ていきましょう。

王国分裂で出来た南朝ユダ王国も偶像崇拜(バアル礼拝)に陥ってしまいます。そこに彼らに襲いかかったのはアッシリア帝国に替わって台頭してきた新バビロニア王国です。紀元前五八七年、新バビロニア王国の軍勢はパレスチナ地方へ侵攻し、首都エルサレムを包囲し、ソロモン神殿を徹底的に破壊されます。神殿内部の財宝はみな跡形もなく略奪され、南朝ユダ王国は滅亡します。南朝ユダ王国の民はバビロンへと捕囚されます。いわゆるバビロンの捕囚であり、またもや奴隷として捕らわれの身になります(参照資料<sup>1)</sup>)。紀元前五三八年、アケメネス朝ペルシャは新バビロニア王国を征服し、キュロス大王に捕囚されていた南朝ユダ王国の人々を開放します。

自由の身になった南朝ユダ王国の民の多くはパレスチナへ帰還し、ソロモン宮殿を再建し、国造りを行いました。南朝ユダ王国は「ユダヤ」と呼ばれるようになります。この国家は紀元二世紀にローマ帝国に滅ぼされるまで続きます。

また、解放後もアケメネス朝ペルシャに居残ったイスラエルの民(東ユダヤ人と言われた)が居ました。居残った理由は、キュロス大王の寛容さにありました。国教はゾロアスタ教でしたが、異邦人に関して彼らの宗教を認め、バビロンの捕囚から五十年が経過しており、国際都市バビロンの生活に慣れていった人々も多かったこと、またイスラエル人の優秀さが買われたこと、があります。イスラエル人は勤勉であり、<sup>注</sup> 律法を重視し、規則正しい生活を送っており、異邦人の国家にあってもその優秀さが買われ、政治の中核(宰相など)へ上り詰める者が多かったこともあり、異邦人の国家にあってもその優秀さ

(注) 律法とは、法律が人の行動を律することに対し、人の心を律するもの。たとえば、ユダヤ教で神から与えられた宗教・倫理・生活上の命令や規定です。モーゼがシナイ山で授けられた十戒はそれに当たります。

宰相になったユダヤ人には古代エジプトのヨセフ、新バビロニア王国のダニエル、そしてアケメネス朝ペルシャにあつてはモルデカイなどがいます。この東ユダヤ人がペルシャ人と共に中国に流れた可能性がある。それは、秦始皇帝の兵馬俑からはペルシャ人の人骨が出土していることから推測できます。

ユダヤ人たちのいた古代オリエント地域の覇権は、アケメネス朝ペルシャからマケドニア、セレウコス朝シリア、そして古代ローマ帝国へと移ります(参照資料<sup>1</sup>)。南朝ユダ王国は属国の立場ながらもかろうじて独立を保っています。だが、ローマの圧政にたまりかねたユダヤ人たちが一斉に蜂起し、紀元六六年、ローマ施政下でイスラエルの独立戦争が起ります。イスラエルでユダヤ人の熱心党(ゼロテ党)がローマの守備隊を襲う事件が発生する。ユダヤ人たちはローマ帝国に対して本格的な独立戦争を開始したのです。皇帝ネロ(紀元三七―六八年)は、紀元六八年にローマ軍を派遣し、圧倒的な軍事力でユダヤ

人反乱を制圧し、エルサレムの第二神殿は完全に破壊されます(コラム参照)。この破壊跡の一部が礼拝場の「嘆きの壁」です。ユダヤ人は国を持つことを諦め、ディアスポラ(民族離散)の旅へと移ることになります。当時、西域には太陽神があり日出づる国のあるオリエント志向がありました。東へ東へと行くうちに東の端にある日本に行きつくことは当然考えられることでした。

### 第三話 日本にやってきた三種の秦人

ここまでに述べましたようにイスラエルの民は苦渋の歴史を有しています。イスラエルの三度の国家滅亡を整理しておきましょう。

\*紀元前七二二年、北朝イスラエル王国は滅亡し、失われたイスラエルの十氏族が歴史上から消えていきます。

北朝イスラエル王国の民はアッシリア帝国軍に捕囚され、紀元前六一二年、奴隷解放後、歴史上から消える。

\*紀元前五八七年、南朝ユダ王国が滅亡し、パレスチナで建国した東ユダヤ人(ユダヤ)と新バビロニア王国の侵攻で滅亡し、バビロン捕囚解放後もアケメネス朝ペルシャに居残ったイスラエルの民に分散する。

\*紀元六六年、ローマ施政下のイスラエルの独立戦争で滅亡する。

ローマ軍は圧倒的な軍事力でユダヤ人反乱を制圧し、エルサレムの第二神殿は完全に破壊される。ユダヤ人は国を持つことを諦め、ディアスポラ(民族離散)の旅へと進む。

このディアスポラの民はどこへ行ったのか？

最も繋がりを感じさせるのが秦始皇帝を祖とする秦人(はたびと)です。日本に多大な影響を与えました。秦人としての移動見てみましょう。朝鮮半島に来たイスラエルの民は総て秦人(しんじん)と呼ばれました。紀元前二世紀から朝鮮を経由し日本への断続的な移動があったと判断できます。

スキタイと共に騎馬民族となったイスラエルの十氏族の一部が、紀元前二世紀から一世紀にかけ断続的に扶余(ふよ)系騎馬民族となり古代朝鮮(馬韓)に流入する。馬韓はあまりの流入の多さと秦人を嫌い朝鮮半島の半分を割譲する。秦

人は「秦韓(辰韓)」と「弁韓(弁辰)」を建国する。馬韓の領土から「百濟」が起る。百濟王家は高句麗と同じ扶余系騎馬民族であることが判明している。

秦帝国(紀元前二〇六年)の崩壊により、秦人となり朝鮮半島へ流入する。秦始皇帝の実父とされる呂不韋(りよふい)は羌族(きょうぞく)であった。「羌族(きょうぞく)」とは失われたイスラエルの十氏族の末裔であることがイスラエルの調査機関アミシャープによって証明されている。

四世紀の第十五代応神天皇紀に記述されている弓月君(ゆづきのきみ)の百廿七県の民の日本への移動は日本書紀に明記されている。

## 参照資料1-6:エルサレム神殿

出典:ウィキペディア



エルサレム神殿



ソロモン神殿

### 第二神殿(ヘロデ神殿)



嘆きの壁

エルサレム神殿(参照資料1-6)は、古代エルサレムに存在したユダヤ教の礼拝の中心地である。唯一の神ヤハウェの聖所であり、アロン(モーゼの兄)の家系の祭司とレビ人と呼ばれるレビ族出身の非祭司階級が祭祀に当たった。歴史的には、

\*紀元前十世紀にソロモン王が建設したソロモン神殿(参照資料1-6)

\*バビロン捕囚からの解放後の紀元前五一五年にゼルバベルの指揮でほぼ同じ場所に再建された第二神殿(ヘロデ神殿)

\*紀元前二〇年にヘロデ大王によって完全改築に近い形で大拡張された第二神殿(ヘロデ神殿・参照資料1-6)

を求めて帝政ローマ期の六六年から七三年まで、ローマ帝国とローマのユダヤ属州に住むユダヤ人との間で行われた戦争である。ユダヤ戦争において、ローマ帝国軍、並びにその同盟軍であったハスモン王朝の母系子孫であるが、ヘロデ大王の曾孫にあたるアグリッパ二世は、ローマ軍の立場を執り、十三のトーチカを三日で作ってシオンを包囲し、ユダヤ人を兵糧攻めにし、投降してくるユダヤ人を磔にし、ユダヤでは真夏に相当する六月八日、九日、十日の三日間に渡って聖所に火を放ち、立て籠もったユダヤ人を虐殺して、その後には神殿を破壊した。

現在「嘆きの壁(参照資料1-6)」と呼ばれる部分は、このヘロデ神殿を取り巻いていた外壁の西側の部分とされ、ユダヤ人は「西の壁」と呼んでいる。この部分を含め外壁はその基礎部分がほぼすべて残されている。

## コラム:「エルサレム神殿」

◆第二章 「徐福伝説」の目次

以降省略

## 参考図書

- 十「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)
- 十「古事記」(竹田恒泰 学研)
- 十「日本の起源は日高見国にあった」田中英道著 勉誠出版
- 十「発見！ユダヤ人埴輪の謎を解く」(田中英道著 勉誠出版)
- 十「高天原は関東にあった」(田中英道著 勉誠出版)
- 十「物部氏の謎」(飛鳥昭雄&三上たける著 学研)
- 十「ヤマトタケルのまほろば」(産経新聞)
- 十「徐福伝説を探る」日中合同シンポジウム(梅原猛&他著 小学館)
- 十「出雲と大和のあけぼの」(斎木雲州著 大元出版)

おわりに

古代史シリーズ8「日本人の祖先と日高見国」の講座を作るに当って、最重要参考図書としたのは田中英道先生の図書です。田中先生は国際美術史学会の副会長を勤められた経験から、従来の記紀を中心とした日本からの視点ではなく、世界の歴史観をもって日本史を捉えられることに特徴があります。

従来の記紀の神代の世界は現実の世界ではないかという観点から、その考古学的事実と記紀の記述を整合させて進められています。

旧約聖書に「エデンの園は東にある」と記述され、その東の果ては日本がある。そこに歴史的記述として古代ユダヤのディアスポラ（流浪の民）の記述が残されている。それらの民は東に向かっていることが分かっている。ということは記述に見られる前から東に向かった民が縄文時代や弥生時代に居たことになる。記紀で言う神代の世界はそういった先史の民が東へ向い日本にやって来た祖先であろうと考えられている。

そして、高天原の位置づけである。国譲りで、高天原から建御雷神が派遣され出雲の大国主神を服従させる。建御雷神は鹿島神宮の祭神であり、かつ神武東征前に出雲大社より前に創立された天皇直系の神宮です。

そうすると、高天原は鹿島近郊にあることになる。果たせるかな、中國の旧唐書・新唐書に日本が「倭」と「日本」からできていると記述する。延喜式の祝詞（のりと）では、大倭・日高見国の存在を記述している。そうすると、今まで議論もされなかつた高天原の实在の蓋然性が極めて高いものになったと言える。現在検証が進められているが、日本の新しい古代史発展に寄与しているのではないかと思当該シリーズをまとめた次第である。

欧米からも、日本の記紀の神話は最も具体的で現実に近いと評価されているのも記紀の裏付けが遺跡や神社、伝説などと符合する多くの箇所を有していることにあるのだろう。今回のアプローチのように神話が近い将来に歴史的事実となることを祈念している。

## 【著者略歴】 井上正和(いのうえまさかず)

熊本大学工学部、九州大学大学院工学研究科卒業後、1971年日本IBM(株)入社しSE部門に配属。1992年、中小・中堅企業コンサルティング部門を立ち上げ、責任者としてコンサルティングプロシージャの普及を図る。

2001年に独立し、有限会社 情報戦略モデル研究所を設立。

経営戦略やIT戦略の策定や構築に係る書籍出版、研修とコーチング支援、業務プロセス改善・改革に係る研修とコーチング支援などを多数手掛ける。2011年4月 神奈川工科大学で「情報と文化」講座で古代史講義を担当した時から、記紀を始めとした古代史に取り組み、素人の観点から古代史研究を開始し、現在まで16年間、16シリーズ(各5回講座)を開発し、古代史の講座を横浜市地区センターを中心に、学者ではない素人にでも分かる古代史セミナーを開催し好評を得ている。今後オンラインでの全国展開を計画している。

## 古代史シリーズ8「日本人の祖先と日高見国」

発行日 令和7年8月吉日 初版発行

著者 井上 正和

発行所 有限会社 情報戦略モデル研究所

〒226-0006 横浜市緑区白山2-2-E-216

TEL:045-934-7254

URL: <http://www.ism-research.com/>

本書は、法令の定める場合を除き、複製・複写することはできません。

●本著の読者お問い合わせは下記を参照ください。

お問い合わせ: [ism.researchbook@gmail.com](mailto:ism.researchbook@gmail.com)

ISBN 978-4-9912583-8-1  
C1021 1000E

発行:情報戦略モデル研究所  
価格:本体価格 1,000 円+税



主な内容
はじめに 第1章 「古代イスラエル王国の歴史」 第2章 「徐福伝説」 第3章 「東国のユダヤ人埴輪」 第4章 「秦王国、日本国、東国」 第5章 「縄文人と日高見国」 おわりに